

やり取りを楽しみ、会話をつなぐ力の育成

～聞き手・話し手の力を育む対話活動の工夫～

柏崎市立松浜中学校

小川 直輝(令和2年度)

研究の概要

本研究は、「やり取りを楽しみ、会話をつなぐ力の育成」をテーマに、中学校英語科におけるスモールトーク活動を通じて、生徒が主体的に英語でやり取りを続ける力を育成することを目的としている。

文部科学省の「全国学力・学習状況調査」(令和5年度)の結果によると、「日常的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を述べ合うことに課題がある。」と示されている。加えて、中学校学習指導要領では互いの考えや気持ちを伝え合うことを重視した言語活動の充実が求められており、生徒が会話を広げ、つなぐ力を育むことが重要な課題となっている。本実践では、会話をつなぐための「リアクション」「質問」などを段階的に指導し、ペア・グループでのスモールトーク活動に繰り返し取り入れることで、会話をつなぐ力を養う。

1 研究主題設定の理由

本研究では、「やり取りを楽しみ、会話をつなぐ力の育成」をテーマに、中学校英語科におけるスモールトーク活動を通じて、生徒同士の会話をつなぐ力を高めることを目指している。文部科学省の学習指導要領外国語科の目標は、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することである。

普通の授業の様子やアンケートを見ると、多くの生徒は英語を話すことに対して抵抗感が少ないものの、会話をつなぐことや相手に適切なリアクションや相槌を取ることが難しいと感じている。このため、スモールトークは単発で終わり、会話の展開が乏しいという課題が浮き彫りになっている。生徒が自信を持って、相手とやり取りするために、相手の発言に対するリアクションや質問を意識的に学び、実践を通じて習得することが大切である。本研究では、こうした課題に対応するために、スモールトーク活動を活用し、会話をつなぐ力を育む方法を探る。このアプローチは、生徒同士のコミュニケーションを深め、英語でのやり取りに対する自信を高める効果が期待される。

2 生徒の実態(1年生 男子16人 女子15人 計31名)

生徒は、小学校から英語に触れる機会が多く、発音やアクセントにおいては非常に優れており、英語を話すことへの抵抗感は少ないと感じられる。しかし、ペア活動やスモールトークの場面を見ていると、会話をつなぐことが苦手で、話し手へのリアクションや相槌が不足している傾向がある。そのため、会話が一問一答で終わり、会話の展開が見られないことが多いのが現状である。特に、英語でのやり取りを続けるための「質問」や「反応」などのコミュニケーションスキルが不十分であるため、会話が深まらず、スモールトークの流れを作ることに難しさを感じている様子が見受けられる。この状況を打破するためには、生徒が会話をつなげられるように、聞き手としてのリアクションや質問を意識的に取り入れ、会話をつなぐ力を育むことが求められる。

英語実践前アンケート（４月）

相手の話に反応するのが得意ですか。

とても思う→３人 思う→７人 あまり思わない→１４人 全く思わない→４人

英語で質問することは得意ですか。

とても思う→１人 思う→５人 あまり思わない→１８人 全く思わない→４人

英語での会話を続けるのが難しいと感じますか。

とても思う→９人 思う→１７人 あまり思わない→２人 全く思わない→０人

英語で会話をすることに楽しさを感じますか。

とても思う→１人 思う→１２人 あまり思わない→１０人 全く思わない→５人

3 教育実践への手立て

(1) 【リアクションマスターになろう】（相槌・反応）〈５月～７月〉

目的：英語のリアクション表現を繰り返し練習することで、場面に応じて使えるようになることを目指す。これにより、会話をする際にしっかりと相手に反応でき、聞き手としての役割を果たす。

活動内容

「Really?」「That's nice!」「Oh, no!」などの簡単なリアクション表現をまとめたワークシートを作成・配布する。活動の導入として、スモールトークやペア活動の前に、教師と一緒にリアクション表現の音読練習を行う。その後、教師が「I have a dog.」「I went to Kyoto.」などの短い発言をし、生徒はどのリアクションが適切かを考えて反応する練習をする。活動に慣れてきたら、生徒同士でのスモールトークやペアワークの中で、リアクション表現を積極的に使うよう促すことで、会話に自然な流れと聞き手の態度を育てる。

(2) 【選んで話そう！選択肢つきペアトーク】（質問）〈５月～７月〉

目的：英語での会話にまだ自信がない生徒も、既習事項を用いた選択肢を選んで使うことで、安心して会話を続けることができるようにする。繰り返し練習することで、言い方を覚え、だんだんと自分の言葉でやり取りできる力を育てる。

活動内容

毎時間の帯活動で、教師が食べ物や音楽、教科など生徒にとって身近なトピックを提示し、「What food do you like?」などの質問を紹介する。生徒が会話の流れを理解できるよう、教師がモデルを見せた後、ペアでの活動に入る。１人が「I like pizza.」などと話し、相手は提示された質問から１つ選んで返答する。これを繰り返し行い、会話に慣れさせる。質問は、慣れてきたら「Who」「When」「Where」など取り入れ、相手の考えを引き出すスモールトークが成立するよう工夫する。

(3) 【振り返りタイム ～言えなかった表現をクラスで共有しよう～】（中間指導の充実）

〈９月～１０月〉

目的：スモールトークを単に行うだけでなく、活動後に「英語で言いたかったが言えなかった表現（言語面）」や「どんな質問をするといいか（内容面）」を振り返り、クラス全体で共有することで、表現力を高め、次の会話に活かす力を育成する。

活動内容

スモールトークを1回行った後に「振り返りタイム」を設け、生徒がペアで「言いたかったが言えなかったこと（言語面）」や「どんな質問をするといいか（内容面）」を共有する。その後、クラス全体で共有し、教師が生徒の発言を拾いながら黒板に書き出す。出てきた内容について、既習の単語や文法を活用してどのように表現できるかを一緒に考え、正しい言い方や自然な表現を確認する。最後に、その表現を使って、もう一度スモールトークに挑戦させることで、学んだことをすぐに実践し、次の会話につなげる。

活動前の指導 → 言語活動1回目 → 中間指導 → 言語活動2回目 → 振り返り

意図：8月末に「free time（自由時間の過ごし方）」をテーマとしたスモールトーク活動を行い、そのやり取りを記録した。分析の結果、1組あたりの会話の平均的なやり取りの回数は約5回にとどまっていた。生徒が「I play soccer.」「I watch TV.」などと答えるものの、その後に、質問を返したり、話題を広げたりすることが十分にできていないことを示していた。そこで、振り返りタイムを設け、やり取りを続けられる会話の「もと」を増やそうと考えた。

<p>例1 A: What do you free time? B: I play soccer. A: Oh, nice. B: What do you free time? A: I watch TV. (終了)</p>	<p>例2 A: Do you play sports free time? B: Play basketball. A: Really? Good. Me too. B: Nice. (終了)</p>	<p>例3 A: I play game my free time. B: Nice. I watch youtube. A: That's good. (終了)</p>
---	--	--

4 実践の結果、考察

(1) 【リアクションマスターになろう】

生徒が相手の発言に対して積極的に英語で反応しようとする姿が見られ、聞き手としての意識や態度が育ってきていることが感じられた。活動を重ねる中で、「Really?」「That's nice!」「Oh, no!」などの表現を使えるようになり、会話のテンポが以前よりも軽快になったように感じる。また、スモールトークの前にリアクション表現を繰り返し練習することで、生徒が安心して会話に臨むことができた。

(2) 【選んで話そう！選択肢つきペアトーク】

あらかじめ提示された質問の選択肢を用いることで、生徒が安心して英語でのやり取りに取り組む姿が見られた。特に、英語を話すことに自信のなかった生徒にとって、選択肢が“支え”となり、安心して発話できる環境づくりにつながった。活動の中では、相手の発言をよく聞き、適切な質問を選んで返す姿が多く見られた。また、継続的に行うことで、質問や受け答えのパターンが定着できた。

一方で選択肢の中から選ぶことに慣れてしまい、自分の言葉で新しい質問を作ったり、話題を広げたりすることには難しさを感じている生徒も多い。会話の自由度が高まると、どのように発話を続けてよいか迷う姿も見られ、まだ自発的な展開力を十分に発揮できていない様子が見られた。

(3) 【振り返りタイム ～言えなかった表現をクラスで共有しよう～】

クラス全体で表現を共有することで、「言えなかったこと」を「次に言えるようにする」という前向きな意識が生まれ、積極的に話そうとしようとしていた。中間指導後にもう一度スモールトークを行うことで、学んだ表現をすぐに使ってみようとする積極的な姿勢が見られ、会話の回数も増加した。実際、活動初期には1組あたりの平均やり取り回数が約5回であったのに対し、中間指導、振り返りを経てスモールトークを行うと7～8回程度に増加した。以下、10月末に生徒同士のやり取りを記録したものである。(以下週末の予定についての small talk)

例1

A: What is your plan for this weekend?

B: I go to Nagaoka.

A: That's nice. Who are you go?

B: My family.

A: Sounds good. Do you eat lunch?

B: Yes, I do. I eat "Saizeria".

A: Saizeria? Oh nice. I want to eat.

例2

A: What is your plan for this weekend?

B: Soccer tournament.

A: Oh really? That's exciting. You can win?

B: Yes, I can. I play soccer every day.

A: That's nice.

B: Do you like soccer?

A: Yes. I watch soccer game youtube.

英語実践後アンケート（10月末）

相手の話に反応するのが得意ですか。

とても思う→5人 思う→7人 あまり思わない→13人 全く思わない→4人

英語で質問することは得意ですか。

とても思う→2人 思う→6人 あまり思わない→14人 全く思わない→7人

英語での会話を続けるのが難しいと感じますか。

とても思う→11人 思う→13人 あまり思わない→3人 全く思わない→2人

英語で会話をすることに楽しさを感じますか。

とても思う→1人 思う→8人 あまり思わない→11人 全く思わない→9人

5 今後の展望

生徒は相手の発言にリアクションを返したり、質問を通して会話を広げたりすることに少しずつ慣れ、以前よりも英語でのやり取りを楽しむ姿が見られるようになった。スモールトークを通して、単元をつらぬいたメインである充実した言語活動ができるようになってきた。単元内容と関連づけることで、学習した表現や語彙を使う機会を増やし、「学んだことを使って話す」場面を意図的に設けていく。

〈 引用・参考文献 〉

令和5年度全国学力・状況調査 報告書【中学校／英語】

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』

全国の実践から学ぶ 中学校英語教育35のポイント 山田誠志